

# 小学校スタートプログラムにおける読み聞かせの利用について —小1プロブレムから円滑な接続へ—

高木 友子<sup>a</sup>

<sup>a</sup> 湘北短期大学保育学科

## 【抄録】

絵本による読み聞かせは乳幼児期より子どもたちに好まれる活動であり、小学校のスタートプログラムにおいても有効である。また、その導入として手遊びや詩のアニメーションも子どもが参加しやすい活動である。読み聞かせを十分に有益なものとするためには子どもの興味に沿った選書が必要である。詩のアニメーションは子どもが楽しく参加できるだけでなく、小学校での国語学習への発展が期待される。

## 【キーワード】

小学校スタートプログラム、絵本、読み聞かせ、詩、アニメーション、手遊び

## 1. 問題

6歳の子どもにとって、幼稚園・保育所・こども園といった保育の場から、小学校へと進学するのは、学びと生活の形態の大きな変化である。日本では2000年頃から目立ち始めた保育形態から小学校教育形態への変化への子どもの不適応現象を「小1プロブレム」と名付け、原因の解明と対策とが行われてきた（新保 2001）。不適応現象とは具体的には、児童が授業中に立ち歩いたり、教員の話に集中できなかったりし、結果的に学習活動が成立しない状況を指す。その原因としては、保育の形態に比べて、小学校の教育形態では子どもがより受動的となり、また、一人の教師が授業

する児童の集団が大きくなるため、児童が教師の指示や話を自分に向けられたものと理解できていなかったり、集中しづらかったりすることが考えられている。

保育形態と小学校教育形態のギャップは2000年以前にも当然存在したが、その不適応が2000年頃から目立ち始めたのは、少子化が進み、子どもたちの経験が変化したことと地域や家庭の教育力が低下したことが原因と考えられ、2008年の調査では、協力した自治体の4割以上から小1プロブレムが報告された（学芸大学「小1プロブレム研究推進プロジェクト」2010）。つまり、小学校入学時の児童の不適応は特殊な現象ではなく、社会状況の変化を背景に生じる必然と見なされつつある。そのため、近年は最早「小1プロブレム」という呼称は用いられなくなった。保育と小学校教育のギャップを従前のままにすれば少なくない

---

<連絡先>

高木 友子 takaki@shohoku.ac.jp

子どもたちが不適応行動を起こす。これを前提に、この形態のギャップを解消するために、幼保小の接続をより円滑に進めるという姿勢が2010年代に入ると文部科学省から提唱され、保育・教育の現場にも漸次広がった（堀越 2017）。幼稚園・保育所・認定こども園と小学校の双方で互いの教育を理解し合った上で、滑らかな接続を可能にするために、教育・保育方法の歩み寄りが求められる。幼稚園・保育所・認定こども園では小学校へのアプローチプログラムを工夫することで滑らかな接続を目指す。小学校は、幼稚園・保育所・認定こども園の保育方法を理解し、応用し、スタートプログラムを作成・実践する。

このように、この約20年は小学校新入児童の不適応の発生とその捉え方の転換の時期であった。問題の発生当初は保育者も小学校教諭もその多くが互いの教育・保育方法や形態を理解・受容しておらず、小1プロブレム研究の場で、互いに発生の責任を押し付け合う姿なども目にした。しかし、そういった中で、教育要領や保育指針を中心に幼稚園・保育所・認定こども園と小学校の連携の必要が示され、保育現場、小学校でも滑らかな接続のための実践努力が数々行われるようになった。しかし、特に首都圏など子どもの多い地域では幼稚園・保育所・認定こども園と進学する小学校とは1対1対応ではなく、また、幼稚園・保育所・認定こども園は私立園が多数存在し、各々特徴的な保育を行っているため一口に「保育」と言っても、その方法や形態が多岐にわたる点が問題である。そのような状況ではすべての保育現場との連携は困難である。実際、接続プログラムの実践例が報告されるのは、系列校を有する国立、私立の幼小であったり、または公立の幼稚園・保育所・認定こども園と小学校とが隣接し、連携している場合であったりすることが多い。しかし、地域によってはこのような1対1対応ではなく、

様々な保育現場から小学校へ進学してくる場合が多く、また、都心部では1つの園から複数の小学校に分かれて進学していく場合も少なくない。その中で主な出身園、または、進学先を選んで連携する場合も有り得るが、その連携の程度も様々であり、進学を控えて年長児が1度小学校訪問をするだけに止まる場合もある。このような状況で保育現場と小学校と連携して接続期のカリキュラムを作ることは難しく、連携の上でというより、それぞれが一般的な保育・教育形態を想定して、保育現場は保育現場でアプローチプログラムを、小学校は小学校でスタートプログラムを作成することになる。アプローチプログラムは小学校就学に向けて必要とされる力を育成するプログラムであり、スタートプログラムは保育と小学校教育の接続を滑らかにするために、生活科を中心に学科を融合させたり、授業時間と休み時間の枠組みを弾力的にしたり、新入学児が馴染みやすい形で学習活動を行っていくことである。アプローチプログラムは多くの場合、年長の2学期から行われ、スタートプログラムは入学から1～2ヶ月、1学期、1年間と学校によって実施期間はさまざまである。平成26年度幼児教育実態調査では17.4%の幼稚園がまだ小学校との接続・連携に着手できておらず、59.6%は年数回の授業や行事、研究会などの交流は持っているが接続を見通した教育課程の編成や実施はできておらず、それができている園は21.5%に止まっていた（堀越）。これまで多くの保育現場、小学校ではそれぞれの立場から接続・連携に取り組み始めてはいるが、その取り組みがそれぞれの保育・教育課程に十分に位置付けられているとは言えないのが現状である（松嵩 2017）。

筆者は2012年度より2017年度までS市A小学校にてスタートプログラムにボランティアとして参加・観察する機会を得、実践とその考察を報告してきた（高木 2013、2014、2015、2016、

2017、2018)。A 小学校のスタートプログラムの在り方とその背景は上述した都心部の小学校の典型とも言え、A 小学校へは複数の幼稚園・保育所からの進学があり、また、それらの幼稚園・保育所からの進学先は A 小学校だけでなく、複数の小学校に渡っている。そのため、小学校と特定の保育現場が密に連携することは難しく、回数の限られた行事的なものとなり、スタートプログラムは連携して作成されるというよりも、小学校が一般的な保育形態と内容を想定して作成されたと思われる。2018 年度からはスタートプログラムの全体への参加・観察はかなわなくなったが、学年集会における読み聞かせは引き続き参加・観察が可能となった。

読み聞かせは、まだ自分で文字を読むことのできない乳幼児を中心に、小学校低学年児童、場合によってはさらに高学年の児童や成人、高齢者を対象とすることもある活動である。まだ思うように文章を読み解くことのできない低学年児童にとって有用な活動であると共に、幼児期から慣れ親しんだ活動なので、スタートプログラムに用いられることがある（新保 2010；益田 2017）。

本稿では、A 小学校のスタートカリキュラムのうち、学年集会での読み聞かせに焦点を当て、その実践の記録と観察から、小学校新入生の適応過程とスタートカリキュラムにおける読み聞かせの効用と在り方を考察する。

## 2. A 小学校スタートプログラム

### (1) A 小学校

A 小学校は首都圏の政令指定都市 S 市内にある。S 市の人口は平成 26 年の約 73 万人をピークに現在まではほぼ横ばいの状況である。A 小学校は都内ターミナル駅より私鉄急行電車で 40 分ほどの駅から徒歩 10 分程度の商住地区にある。都心

への交通の便が比較的良いことから、現在まで戸建て住宅やマンションの建築が進められている地域であり、A 小学校の児童数は約 900 名、調査対象の 8 年間、1 年生の人数は多少の増減があるが、毎年約 130 ～ 150 名程度で 4 ～ 5 クラスの編成であり、全校児童数はほぼ増え続けている。

### (2) すこやかプラン

A 小学校では 2011 年度より小 1 プロブレム対策として、「すこやかプラン」を実施している。「すこやかプラン」は当初、保育現場の小集団から小学校の大集団に慣れることを目的とすると学校から紹介されていたが、2017 年度からは学年全体で新入学児童の特徴を理解し、子どもたちがスムーズに小学校生活に入ることを目的とすると紹介されるようになった。

プラン実施期間は概ね 4 月中の約 3 週間である。

2013 年度までの 3 年間は 4 月中は仮クラスとし、担任も仮となり、1 年生全クラス（いずれの年度も 4 ～ 5 クラス）を 1 ～ 3 日でローテーションし、4 月末をもってクラスを再編成し、担任と共に決定していた。しかし、この方法は新入学児と担任教諭との関係の構築を困難にし、むしろ適応を妨げられると思われ、2014 年度からは行われなくなった。

2011 年度より継続して実施されているのは、毎朝の学年集会と授業時間の弾力化、6 年生と保護者による新入生サポートである。

学年集会は全校集会などの行事とぶつからない限り、ほぼ毎朝もたれ、校舎の 1 階端にある 1 年生の教室から別棟 3 階の反対端にある多目的室に私語をせず、走らず、並んで移動することも含む。集会の内容は、お話ボランティアの読み聞かせ、校歌などの歌の練習、担任からの講話である。

お話ボランティアは上級生児童保護者、卒業生保護者、地域ボランティアにより構成され、必ずしも専門的な知識や技術を有する者ではない。

### 3. 2011年度から2018年度の学年集会における読み聞かせ

小1プログラムと称される新入学児童の不適應行動には、児童が教諭から集団への話に集中できないことが挙げられている。読み聞かせは絵本の絵とストーリーの力を借りて、集団の場でも子どもたちが話に注意を向けやすい活動であり、保育の場で盛んに行われ、そのため、スタートプログラムに取り入れられることも珍しくない。A小学校でも集団に対する語り掛けに注意を向けやすいよう、学年集会に読み聞かせを取り入れたと考えられる。

しかし一般に読み聞かせはクラスもしくはそれより小さな集団で行われるか、または図書室などで読み聞かせへの参加を主体的に選択した子どもたちを対象にする。A小学校の新入学児童は毎年130～150名と多く、学年集会はその大きな集団での活動に慣れるためと、1年生担任教諭全員がローテーションを用いずとも学年全体を理解するために行われるが、通常は多くとも50名程度で行われる読み聞かせが約3倍の人数で行われるのは厳しい環境条件である。また、この人数が1教室に収められるので、体育座り（三角座り）をする子どもと子どもの間は文字通り足の踏み場もないほどである。このような状況で整列時、歌の練習や担任講話に集中できない児童が一部観察されたのはやむを得ないとも言える。しかし、その中で集会の最初の時間帯に行われたという利点はあるが、ほとんどの子どもたちが読み聞かせに注意を払ったのは絵本（紙芝居）と読み聞かせと言う活動の持つ力とも言える。

一般にボランティアによる読み聞かせの選書は教員からリクエストがあったり、教員とボランティアで相談して選書したりする場合もあるが、A小学校ではボランティアに一任されている。読

み聞かせがスタートプログラムに取り入れられたのは、新入学児童が注目しやすいためと、ボランティアが読み聞かせをしている間、教員が児童全体に目を配ることができるためと思われ、読み聞かせの内容についてのねらいは特に設定されなかった。

2011年度のスタートプログラムには筆者は参加・観察できなかったが、読み聞かせの記録を入手し、お話ボランティアに当時の様子についてインタビューを行えた。スタートプログラム開始初年度は教員もボランティアも試行錯誤していたようだ。表の記録からわかるように初年度は普通サイズの絵本も何回か読まれている。しかし、100名を超える児童が1冊の普通サイズの絵本を見ることは難しい。そのことは当時のボランティアも見て取り、小学校で所蔵している限りの大型絵本が使用された。しかし、A小学校の大型絵本の収蔵数は多くはなく、スタートプログラム全期間の読み聞かせに対応するだけの数はなかった。初年度のスタートプログラムお話会は子どもたちがあまり集中できていなかったという感想がボランティアから得られたが、絵本が見づらい状況ではそれも無理はないと考えられる。

2012年度からの学年集会では、場所が狭かったり、姿勢がきつかったりすることで児童が故意に、または故意ならざるともぶつかり、いざこざが生じたり、近年は教員の指示に従わない児童も散見されたりしたが、読み聞かせに関しては、静かにではなくとも、注意を払い、聞いている児童が殆どであった。2015年度からスタートプログラムの開始時期を中心に、読み聞かせ中の児童の発言が目立った。発言は読み聞かせに関するものではあるが、読み手や教員から求められたものではなかった。感想の短い発露のような必ずしも読み聞かせの妨げにはならないものも多かったが、ちゃちゃのような発言もまた多かった。また、2016年



度からは授業中と集会中の姿勢の乱れが目立つようになった。読み聞かせ中の発言に関して教員やボランティアが指導をするようなことはなかったが（歌の練習や教員の講話のような教員が進行する活動を妨げるような発言や行為については教員が適宜指導をしていた。）ちゃちゃのような発言はスタートプログラム後半には収まり、若干の感想的発言を残すのみとなった。2018年度は姿勢の乱れがあり、発言も皆無ではないが、目立つようなことはなく、学年集会全体が前2年度に比べると教員やボランティアの話に児童が的確に注意を払っているように見受けられ、集会中の児童のトラブルも少なかった。

姿勢の乱れは、入学までの子どもたちの生活経験の不足によるものではないかと考えられる。家庭や園で姿勢を正して座ったり、姿勢を保つよう求められることが減っているのかもしれない。背筋腹筋が未発達であることも危惧される。

2015年度からは小学校教員の指導も緩やかになった。その前年度までは児童の言動が規範から逸脱するとかかり細かく指導していたが、2015年度から2017年度はあまり細かい指導・指示が行われなかった。これが教員の意図した状態か非意図的なものかは不明である。そして、2018年度は2014年度以前のように細かい指導ではないが、教員が児童の逸脱を見過ごさず、丁寧に待っている様子が観察された。また、担任教員間の合意の徹底が感じられた。このような教員の姿勢が児童らの状態に影響したとも考えられる。

#### 4. スタートプログラムにおける読み聞かせプログラムについて

前述したように読み聞かせの内容についてはボランティアに任されていた。スタートプログラム開始初年度は読み聞かせの実施において試行錯誤

しており、普通サイズの絵本では対応できないほど対象児童が多いにも関わらず、必要な数の大型絵本を用意することもできず、小学校に所蔵されている限りの大型絵本を使用し、不足分は普通サイズの絵本や紙芝居で対応するのが精一杯であった。

翌年度からは前年度の反省を踏まえ、本学図書館の協力も得て、原則毎回大型絵本を用意した。

大型絵本は普通サイズで出版された絵本のうち、読み聞かせに適したストーリーや挿絵で、多くの読者の支持を得たものが大型化される。その数は多くはなく、読み聞かせの対象は乳幼児が中心であるため、新入児童とは言え、小学生に内容的にふさわしい大型絵本は沢山はない。また、100人を超える児童に見やすく、ボランティアが入手しやすい大型絵本と、選書にいろいろな制約がある。そのため、使用された大型絵本は入手のしやすさなどが優先され、必ずしも全てが小学1年生にふさわしい内容ではなく、幼児向けの本も多い。だが、その中でも2012年度からは、基本的には幼い内容から文章の多い本へと進むようにプログラムを組んでいる。また、内容的には幼いものもあるが、「へびくんのおさんぽ」（いとう 2006）「あかまるちゃんとくろまるちゃん」（上野 2009）「おばけのてんぷら」（せな 2004）「おまえうまそうだな」（宮西 2006）「999ひきのきょうだい」（木村 2005）「にゃーご」（宮西 2003）などは二人読み、三人読みなど演出を加え、小学生が興味を持てる工夫を施した。

2012年度以降に普通サイズの本から選書された「ぼくのおべんとう」「わたしのおべんとう」（スギヤマ 2003）は、19.8センチ×15センチと大きな本ではないが、線や色彩がはっきりしており、また、本の見開きいっぱいには弁当を描いているため、遠くからでも見やすく、選書が続いている。また、演出として1冊ずつ読むのではなく「ぼく」

のおべんとうと「わたし」のおべんとうの内容をそれぞれ異なる読み手が1見開き毎に交代で紹介する。絵本だけを見るというより、絵本に描かれた弁当を手にした役者の寸劇を見ているようで、小さな本にも関わらず満足が得られる演出となっている。

また「きょだいなきょだいな」(長谷川 2001)では繰り返される「あったとさ あったとさ」のフレーズを読み手に続いて、児童も唱えるアニメーションの手法を採用し、読み聞かせ後も、児童らがフレーズを口ずさむなど楽しめるプログラムとなっている。

逆に「はらぺこあおむし」(カール 1994)は初年度から選書されてきたが、あまりに子どもに知られ過ぎており、児童らがあまり集中しないため、選書からはずされることもあった。

「ちびゴリラのちびちび」(ボーンスタイン 2003)は知られてはいないが、プログラム開始時期に読まれるせいか、読み手の力量のせいか、または話の構成が小学生には幼いのか、集中できず、ちゃちゃを入れる児童が出やすい。選書の検討が必要と思われる。

導入に関しては記録が完全には残っていない。プログラム開始から3年ほどの間は手遊びが行われていた。開始初年度2014年度の後半に「のはらうた」シリーズ(工藤 1984,1985,1987,2000,2008)の詩を朗読し、どの自然物についての詩か当てるクイズ形式のアニメーションが取り入れられた。

2018年度は手遊びよりもむしろ谷川俊太郎の詩を読み手を追って児童が唱えるアニメーションが多用された。

児童らは手遊びも詩のアニメーションもよく楽しんだ。

## 5. 全体的考察

読み聞かせはスタートプログラムに有用な活動と言えるだろう。2015年度から2017年度に目立った学年集会における歌の練習や教員の講話などに集中できない児童らも発言はあれども、読み聞かせを楽しんでいる様子があった。また、導入の手遊びや詩のアニメーションも楽しめていたことから、子どもにとって内容が面白く、主体的に参加できれば設定された集団行動(しかもA小学校の場合はかなり大きな集団)に参加できることがわかる。

しかし、一方でプログラム開始時期であったり、「はらぺこあおむし」や「ちびゴリラのちびちび」のように児童らが興味を持ちにくい内容だったりすると、ちゃちゃのような集団活動を乱す発言が増えた。

聞き手の発言にどう対応するかは読み手による。「おしゃべりをせずに静かに聞く」ことを求める読み手もいるが、聞き手が思わず口にする感想は必ずしも読み聞かせの邪魔にはならず、A小学校のボランティアたちもそのように捉えている。しかし、読み聞かせの妨げとなってしまうようなタイプの発言も存在する。いずれの年度もプログラムの後期にはそのような発言が目立たなくなっていることから、児童が集団に適応することで問題は解決するとも言えるが、児童らが十分に興味を持てる絵本を選書することも有効かつ望ましいことであろう。

前述したように、A小学校の教員は少なくともスタートプログラムにおいては絵本の読み聞かせという形式と、ボランティアの参加で教員たちが活動の進行から離れて児童を見られることを期待しており、読まれる内容に要求はないようである。

しかし、これまで選書された絵本には1年生にはかなり幼いものも含まれる。大型絵本の種類が

表 学年集会における読み聞かせの記録

年度	月日	導入	書名
2011	4月7日(木)		ちびゴリラのちびちび
	4月8日(金)		としゃかんライオン(普通)
	4月11日(月)		コッケモーモー(普通)
	4月12日(火)		たぬきのちょうちん(普通)
	4月14日(木)		ともだちや(普通)
	4月18日(月)		もりのなか(普通)
	4月19日(火)		ふしぎなナイフ(普通)
	4月20日(水)		でんしゃにのって
	4月21日(木)		きょだいなきょだいな
	4月22日(金)		からすのぼんやさん
	4月25日(月)		こずめのぼうけん
	4月26日(火)		花さかじいさん(普通)
	4月27日(水)		はじめてのおつかい
	4月28日(木)		ぐるんぱのようちえん
2012	4月9日(月)	キャベツの中から(手遊び)	はらべこあおむし
	4月10日(火)	カレーライス(手遊び)	もこ もこもこ
	4月12日(木)	いっぽんといっぽんで(手遊び)	でんしゃにのって
	4月13日(金)	権兵衛さんの赤ちゃん(手遊び)	ちびゴリラのちびちび
	4月16日(月)	こっからうさぎさんがかけてきて(手遊び)	ぞうくんのさんぽ
	4月17日(火)	たまごたまご(手遊び)	へびくんのさんぽ
	4月18日(水)	八兵衛さんと十兵衛さん(手遊び)	あかまるちゃんどろまるちゃん
	4月19日(木)	はっぱはっぱどこだ(手遊び)	おたまじゃくしの101ちゃん(紙芝居)
	4月20日(金)	山小屋一軒(手遊び)	おぼけのてんぶら
	4月23日(月)	大きな栗の木の下で(手遊び)	どうぞのいす
	4月25日(火)	ボキボキダンス(手遊び)	すてきな三にんぐみ
	4月27日(金)	宇宙人(手遊び)	きょだいなきょだいな
	4月28日(土)		
2013	4月11日(木)		はらべこあおむし
	4月12日(金)		ちびゴリラのちびちび
	4月15日(月)		でんしゃにのって
	4月16日(火)		たまごにいちやん
	4月17日(水)		あかまるちゃんどろまるちゃん
	4月18日(木)		おたまじゃくしの101ちゃん(紙芝居)
	4月19日(金)		へびくんのさんぽ
	4月22日(月)		もこ もこもこ
	4月24日(水)		おぼけのてんぶら
	4月25日(木)		どうぞのいす
	4月26日(金)		きょだいなきょだいな
	5月1日(水)		おまえうまそうだな
	5月2日(木)		すてきな三にんぐみ
2014	4月9日(水)	はじまるよ(手遊び)	はらべこあおむし
	4月10日(木)	キャベツの中から(手遊び)	ちびゴリラのちびちび
	4月14日(月)	たまごたまご(手遊び)	たまごにいちやん
	4月16日(水)	はじまるよ(手遊び)	おぼけのてんぶら
	4月17日(木)	おちたおちた(手遊び)	きょだいなきょだいな
	4月21日(月)	パンダの目(手遊び)	でんしゃにのって
	4月22日(火)	なないろドレミ(詩)	
	4月22日(火)	ぼくとおひさま(詩)	へびくんのさんぽ
	4月24日(木)	あいさつ(詩)	
	4月24日(木)	たまごたまご(手遊び)	おまえうまそうだな
	4月25日(金)	だんごダンス(詩)	
	4月25日(金)	でたりひっこんだり(詩)	あかまるちゃんどろまるちゃん
	4月25日(金)	しっぽバイバイ(詩)	
2015	4月8日(水)		ちびゴリラのちびちび
	4月9日(木)		はらべこあおむし
	4月10日(金)		あかまるちゃんどろまるちゃん
	4月13日(月)		でんしゃにのって
	4月15日(水)		へびくんのさんぽ
	4月16日(木)		きょだいなきょだいな
	4月17日(金)		たまごにいちやん
	4月20日(月)		おぼけのてんぶら
	4月21日(火)		ぼくのおべんとう(普通)
	4月23日(木)		わたしのおべんとう(普通)
	4月24日(金)		どうぞのいす
	4月27日(月)		すてきな三にんぐみ
	4月27日(月)		おまえうまそうだな
2016	4月7日(木)		ちびゴリラのちびちび
	4月11日(月)		あかまるちゃんどろまるちゃん
	4月13日(水)		でんしゃにのって
	4月14日(木)		きょだいなきょだいな
	4月15日(金)		キャベツくん
	4月18日(月)		たまごにいちやん
	4月19日(火)		すてきな三にんぐみ
	4月21日(木)		おぼけのてんぶら
	4月22日(金)		どうぞのいす
	4月25日(月)		ぼくのおべんとう(普通)
	4月27日(水)		わたしのおべんとう(普通)
	4月27日(水)		999ひきのきょうだい
	4月28日(木)		おまえうまそうだな
2017	4月7日(金)		はらべこあおむし
	4月10日(月)		キャベツくん
	4月14日(金)		でんしゃにのって
	4月17日(月)		きょだいなきょだいな
	4月18日(火)		にやーご
	4月20日(木)		どうぞのいす
	4月21日(金)		おぼけのてんぶら
	4月24日(月)		たまごにいちやん
	4月26日(水)		すてきな三にんぐみ
	4月27日(木)		999ひきのきょうだい
	4月28日(金)		おまえうまそうだな
	4月28日(金)		
	4月28日(金)		
2018	4月9日(月)		ちびゴリラのちびちび
	4月12日(木)		でんしゃにのって
	4月13日(金)		キャベツくん
	4月16日(月)		にやーご
	4月17日(火)	めまどあけろ(詩)いしころ(詩)たらかずのこさかなのこ(詩)など	すてきな三にんぐみ
	4月20日(金)		たまごにいちやん
	4月23日(月)		999ひきのきょうだい
	4月25日(水)		どうぞのいす
	4月27日(金)		おまえうまそうだな
	4月27日(金)		
	4月27日(金)		
	4月27日(金)		
	4月27日(金)		

網掛：観察できず

少ないとは言っても、まだ他に1年生の興味・関心と理解力にかなう本はある。選書の検討が続けられるべきだろう。

とは言え、A小学校のスタートプログラムでの150人近くを1教室に集めるという読み聞かせ環境はかなり特殊であり、望ましいものとは言えない。担任ローテーション制を廃して、学年担任全員が学年全員を把握するために毎日学年集会を行うのは、毎年プログラム後期には児童らの適応が見られることを考えれば有効と考えられるが、本来は適切なサイズの教室が使われるべきだろうし、読み聞かせにしても講話にしても1クラスサイズで行われた方が児童らの参加はもっと容易だろう。絵本も大型絵本に限定することなく、もっと1年生にふさわしいものを選書できる。

導入に関しては、児童らは手遊びも詩のアニメーションもよく参加した。手遊びは保育現場ではよく行われ、子どもたちに好まれるため、スタートプログラムへの適用が薦められる活動である(和田 2013)。A小学校でも、お話ボランティアからだけでなく、2017年度には教員からも行われた。しかし、手遊びも子どもに好まれるとは言え、何でもやればいいというわけではない。保育者が手遊びを行う場合、当然、子どもの発達に合わせて遊びを選択する。お話ボランティアの手遊びは幼いものも混じってはいるが、絵本のテーマを考え、バリエーションをつけて、楽しめるように配慮されているが、教員から設定されたのは「グーチョキパーで何作ろう」であった。年長の子どもの向けの手遊びではないが、和田の前掲書でも薦められている。接続プログラムを考えるにあたって、子どもたちが慣れ親しんだ保育活動を小学校教員が採用することが奨励され、教員の努力は見られるが、その内容に関してまだ研究が不足していると言えよう。

手遊びが児童らに楽しまれたとは言え、やはり

乳幼児向けの活動であり、読み聞かせの導入としての手遊びから小学生の活動への発展は難しい。詩のアニメーションは国語学習への発展が期待される。絵本の選書も導入も徐々にボランティアたちが工夫を重ねてきているところで、まだまだ工夫の余地はある。

読み聞かせは、これまで紹介されているように新入児童が参加しやすい活動で、スタートプログラムとして有効と言えるだろう。A小学校のスタートプログラムでの読み聞かせは、かなり限定された難しい条件を伴うが、それでもやはり新入児童にとって有益であり、約3週間読み聞かせを含む学年集会を重ねる中で、児童らは小学校の活動に適応していく様子が観察された。選書と導入におけるさらなる工夫が、読み聞かせをより有意義な活動に至らしめるだろう。

## 6. 引用文献

- いとうひろし(2006)「大きな絵本へびくんのおさんぽ」鈴木出版  
 上野与志(2009)「大きな大きな絵本あかまるちゃん とくろまるちゃん」チャイルド本社  
 カール,E.(1984)「ビッグブックはらぺこあおむし」偕成社  
 木村研(2005)「大きな大きな絵本999ひきのきょうだい」チャイルド本社  
 工藤直子(1984)「のはらうた」童話屋  
 工藤直子(1985)「のはらうた2」童話屋  
 工藤直子(1987)「のはらうた3」童話屋  
 工藤直子(2000)「のはらうた4」童話屋  
 工藤直子(2008)「のはらうた5」童話屋  
 新保真紀子(2001)『『小1プロブレム』に挑戦する』明治図書  
 新保真紀子(2010)「小1プロブレムの予防とスタートカリキュラム」明治図書  
 スギヤマカナヨ(2003)「はくのおべんとう」(アリス館)  
 スギヤマカナヨ(2003)「わたしのおべんとう」アリス館  
 せなけいこ(2004)「(大きな絵本) おばけのてんぷら」ポプラ社  
 高木友子(2013)「小1プロブレム対策を考えるー保護者サポーターから見たS市すこやかプランー」



湘北紀要第 34 号 41-49

高木友子 (2014) 「小1 プロブレム対策を考える 2 - 保護者サポーターから見た S 市すこやかプラン 2 -」 湘北紀要第 35 号 85-92

高木友子 (2015) 「小1 プロブレム対策を考える 3 - 保護者サポーターから見た S 市すこやかプラン 3 -」 湘北紀要第 36 号 45-52

高木友子 (2016) 「小1 プロブレム対策を考える 4 - 保護者サポーターから見た S 市すこやかプラン 4 -」 湘北紀要第 37 号 85-94

高木友子 (2017) 「小1 プロブレム対策を考える 5 - 保護者サポーターから見た S 市すこやかプラン 5 -」 湘北紀要第 38 号 51-61

高木友子 (2018) 「小1 プロブレム対策を考える 6 - 保護者サポーターから見た S 市すこやかプラン 6 -」 湘北紀要第 39 号 71-81

東京学芸大学「小1 プロブレム研究推進プロジェクト」(2010)「小1 プロブレム研究推進プロジェクト 報告書」未公刊

ボーンスタイン, L.(2003)「ほるぷ出版の大きな絵本 ちびゴリラのちびちび」ほるぷ出版

堀越紀香 (2017) 「幼少接続期カリキュラム―全国自治体調査の分析―」国立教育政策研究所プロジェクト研究「幼少接続期の育ち・学びと幼児教育の質に関する研究」(平成 27～28 年度) 成果報告会

益田正子 (2017) 「スタートカリキュラム実践例」同上

松壽洋子 (2017) 「国内における幼小接続研究の動向」国立教育政策研究所「幼少接続期の育ち・学びと幼児教育の質に関する研究」＜報告書＞19-29.

宮西達也 (2003) 「大きな絵本にゃーご」鈴木出版

宮西達也 (2006) 「(大きな絵本) おまえうまそうだな」ポプラ社

和田信行 (2013) 「スタートカリキュラムがよくわかる！小1 プロブレムを起さない教育技術」小学館

## 謝辞

学年集会を見せて下さった A 小学校の先生方、  
ならびに児童の皆さん、お話ボランティアの皆さんに心より感謝申し上げます。

## Reading Picture Books on the Start Program of Elementary School -From the 1st Grade Problem to the Smooth Connection

Yuko TAKAKI

### 【abstract】

Reading picture books is useful on the Start Program of Elementary School. The 1st graders also enjoyed finger plays and animation of poems as introduction of the books. It needs to select books matched with the children's interest. The animation program will lead good learning of literature at elementary school.

### 【key words】

reading, picture book, 1st grader, animation, poem